

演題番号：E8

## 管内と畜場に搬入された肥育和牛の伝染性リンパ腫ウイルス抗体の保有状況と衛生対策

○岩田徳余<sup>1)</sup>，岡本万智子<sup>2)</sup>，大城彩音<sup>1)</sup>，橋本諒平<sup>1)</sup>，榮林結実<sup>1)</sup>，水谷敢太郎<sup>1)</sup>，星野桃子<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 京都府中丹西保健所，<sup>2)</sup> 京都動物愛護センター

1. はじめに：牛伝染性リンパ腫の発生件数は、近年増加の一途を辿っている。2010年の全国調査では肉用牛の牛伝染性リンパ腫ウイルス（以下、BLV）抗体保有率は28.7%と報告されているが、管内のと畜場においても、散発的にその発生が認められ、2023年に調査したと畜場搬入牛の抗体保有率は35%と高値を示していた。このため、感染拡大の要因を把握し、予防対策の一助とするため、過去に実施した当所の調査結果とも比較し、分析を行った。

2. 材料および方法：2008～2011年、2015年および2023年にかけて、管内と畜場に搬入された府内で肥育された黒毛和種1581頭から血液を採取し検査に供した。2008～2010年度は受身赤血球凝集反応（日生研株式会社）、他の期間はELISA法（ニッポンジーン製）を用いて抗体保有の有無を判定した。その結果を用いて、感染を拡大している要因（導入地域等）について分析を行った。

3. 結果：今回の調査の対象牛は、北海道、近畿地方、九州地方から導入されており、導入地域別での抗体保有率は、調査期間を通じて九州地方が高かった。近畿地方も高い抗体保有率ではあったが、近年の保有率は低く推移していた。牛

伝染性リンパ腫による全部廃棄事例を糸口に抗体保有率との関連性について検討し、導入日別での解析を行ったところ当該牛と同一導入日の牛で抗体保有率が高くなる傾向があったが、明確な差は認められなかった。肥育農場別では、全農場で、調査した年ごとで抗体保有率の変動が大きく、また抗体保有率が10%程度の農場もあれば、61%と高値を示す農場もあり、農場間でも大きな差が認められた。

4. 考察および結語：搬入された牛のうち、導入地域が九州地方である牛の抗体保有率が高く、すでに感染した状況で府内に導入され、農場内で感染を拡大させている可能性が考えられた。管轄と畜場の主要出荷者は、飼養農家や関係者からの聞き取り等から、子牛の導入を共同で実施しており、農場内での吸血昆虫による媒介だけでなく、導入元からの移送や除角作業などでの水平感染リスクの可能性も大きいことが明らかになってきた。今年度に発生した全部廃棄事例を契機に、出荷者に対して除角作業時の器具消毒の徹底に重点を置いた注意喚起を試みた。今後どのようにBLVの感染状況に影響を与えるか、データを蓄積して経過を観察していきたい。